

第30回目 新しい人を身に着る (2)

はじめに

●前回は「古い人を脱ぎ捨て・・新しい人を身に着る」(4章 22, 24節)べきことについて学びましたが、今回も引き続き、同じテーマで考えてみたいと思います。「新しい人」とは、「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人のこと」ですが、その「新しい人を着る」というのはどういうことなのでしょうか。

●ここで一つ質問です。「あなたはキリストから何を学びましたか。」・・・この質問こそ、今回、繰り返し、繰り返し問いかける質問です。「あなたはキリストを信じて、キリストから何を学びましたか」、「私はこれまでキリストから何を教えられたのだろうか。」「クリスチャンとして、私はキリストから何を学ばなければならないのか」—この問いかけこそ、「新しい人を身に着る」ことの内実です。「新しい人を身に着る」ということを、別のことばで言うならば、以下のようにも表現できることを前回で取り上げました。つまり、

①「キリストのように」生きること。②「キリストの心」を心とすることです。そのことを(エペソ人への手紙のテキストから離れますが)、今回も共に考えてみたいと思います。

1. 「わたしがしたとおりに、あなたがたもするように」との招き

●イエシュアが十字架にかかれる前の晩、弟子たちと共に最後の晚餐をなさいました。そのとき、イエシュアは弟子たちの足を洗われました。弟子たちは、弟子たちの中でだれが一番偉いかと話し合ったばかりでした。そんなときイエシュアは、やおら、席から立ち上がり、上着を脱ぎ、タオルを腰にまとい、たらいに水を入れ、ひざをついて弟子たちの足を一人ひとり洗われたのです。この仕事は、当時、奴隷の仕事でした。しかしイエシュアは、自らへりくだられて弟子たちの足を洗い、腰にまっていたタオルで拭かれました(ヨハネの福音書 13:4~5)。彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、イエシュアは彼らに言われました。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。・・・そのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」と。そしてこう言ったのです。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」(ヨハネの福音書 13:15)

●「わたしがしたとおりに、あなたがたもするように」、これがパウロの言う「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着た」人の生涯の指針です。あらゆる点において、主が私たちにされたことを、私たちも私たちにかかわる人に対してするようにと求めておられます。ここではイエシュアが弟子たちの足を洗うというへりくだった姿を見ることができそうですが、「わたしがしたとおりに」とは、単に、足を洗うこと、仕えることではありません。イエシュアがしたことすべてを含んでいます。神の御子であるイエシュアが人として歩まれ、この地上で私たちの立場になられたとすれば、どのような行動を取られたのか、その実例を見ることができるのです。

## (1) 自覚的・主体的な行為へのうながし

●使徒パウロは「あなたがたは、古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を着るべきです」と語っています。原文のギリシア語では「脱ぎ捨てるべきこと」と「新しい人を身に着るべきこと」が不定詞**アオリスト中態**で表現されています。つまり、明確な自分の意志によってなすべきだということの意味をしています。あるいは、ローマ書 12 章 2 節にあるように、「心の一新をもって自分を変える」ということでもあります。きわめて自覚的、主体的な行為です。その主体的な行為の方向は、「主がなされたとおりに、私もする」、「主がなされたように、私もそのように生きる」、「キリストのように生きる」という決意です。この決意をうながすことばが、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示した。」(ヨハネ 13:15)と言えます。

## (2) 神が望んでおられるみこころは、「イエシュアのように」なること

●あなたに対する神のご計画、神が望んでおられるみこころは、心の霊において新しくされ、あなたが「イエシュアのように」なることです。「似た者夫婦」ということばがあります。長い間、生活を共にすることによって、価値観や考え方が似てくる(顔まで似てくることもあります)、互いに影響し合うことによって心が一つに溶け合っている夫婦という意味です。同様に、私たちが主とともに歩むことを通して、心がイエシュアと一つになることを神は望まれているのです。

●神は、私たちのありのままを愛しておられることは間違いありません。しかしずっとそのままにしてはおかれません。イエシュアの心が御父の心と一つであられたように、神は私たちにイエシュアの心と一つになってほしいと願っておられるのです。

## 2. キリストのように生きる

●「キリストのように」生きるとはどういうことかをもう少し突っ込んで考えてみましょう。それは、

- (1)キリストが神(御父)を信頼したように、神を信頼すること。
- (2)キリストが神(御父)を愛し、人を愛されたように、愛のうちを歩むこと。

### (1) キリストが神(御父)を信頼したように、神を信頼すること

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。」(ヨハネ 5:19~20)

●19 節の「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。」ということばは、イエシュアが神の御子として、生涯に

## אגרת שאול אל האפסים

わたって、御父を信頼し(あるいは依存し)ておられたということの告白です。子どもはその成長の過程において、自分が尊敬する人を真似ようとするものです。ある種のモデルを作ります。それが自分の父親であったり、母親であったり、あるいは学校の先生であったり、やがてはアイドル・スターであったり・・・と。それは尊敬(あるいは、憧れ)のゆえです。いやいや真似るのではありません。大好きだから真似るのです。そこには信頼関係があります。尊敬する対象を真似ながら、多くのことを学び、身につけていくのです。

●御子イエシュアにとって、御父は永遠の信頼すべきお方です。「わたしと父とはひとつです」(ヨハネ 10:10)という告白ほど、永遠のゆるぎない信頼関係を表していることばは他にはありません。ですから、イエシュアは「わたしを見る者は、父を見たのです」と言われたのです。

●「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。」(ヨハネ 5:19)・・・ここには、自発的・主体的従順があります。決して強制されてするものではありません。自ら、父のしておられることを自分もしたいという従順と信頼があります。この御子の御父に対する関係のコピー(写し)が、私たちの御子イエシュアに対する関係です。御父を信頼する御子に似た生き方をするようにと、御子イエシュアは私たちを招いているのです。

●イエシュアは御父との絶えることのない交わりの中に生きておられました。そのことを示しているひとつの記事があります。

【新改訳改訂第3版】ルカ2章42～50節

- 42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、
- 43 祭りの期間を過ぎしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。
- 44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、
- 45 見つからなかったので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。
- 46 そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真ん中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。
- 47 聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。
- 48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」
- 49 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」
- 50 しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった。

●ここには12歳のイエシュアのことばが記されています。特に、2章49節の「わたしが必ず自分の父の家にいる」ということばは重要です。この表現の中に、御父を信頼し、御父とともに生き、御父のみこころの中に生き、御父の守りの中に安心して憩っているイエシュアの姿があります。このかわり、嵐の中で弟子たちが死の恐

## אגרת שאול אל האפסים

れで必死になっているのに対して、イエシュアだけが眠っておられたということの中に、御父とのゆるぎないかわりがあったことをあかししています。なぜなら、イエシュアが自分に対する御父の計画を知っておられたからです。ヨハネの福音書 5 章 19 節の次の節(20 節)を見てみましょう。

5:20 それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。

●これは驚くべきことではありませんか。御父を信頼して、自分のすることを、すべて御父のみこころに従うという御子イエシュアの自覚的・主体的な決心があるところには、「父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになる」のです。このことは例外ではありません。「わたしがしたとおりに、あなたがたもするように」との招きを受けた私たちが、御子イエシュアが御父に対して取った態度を模範として生きようとするならば、御父はご自分のなさることをみな、お示しになるということです。あなたはこのことを信じますか。そのために、いっさいの力と知恵と権威が与えられることを信じますか。

●私たちが自分で神のために何かをしようという必要は一切ありません。自分のヴィジョンや自分の計画も要りません。なぜなら、御父がご自分のなさることをあなたにお示しになるからです。人間的な年間計画や長期ヴィジョンも要りません。なぜなら、御父がなさる計を、自分に信頼する者に示そうとされるからです。むしろ大切なことは、神の子どもとされた私たちが**いつも父の家に住むこと**です。そこで**御父の心に触れる**ことです。そうすれば、御父がなさる計を知られることが示されると信じます。御子イエシュアがそうであられたように。この関係にイエシュアは私たちに招いておられるのです。

### (2) キリストが神(御父)を愛し、人を愛されたように、愛のうちを歩むこと

●私たちが御父の家に住み、御父のみこころを行うことを決心するならば、御父はなにをしようとされるかは、おのずと示されると言いましたが、それは大きなことだけでなく、日常のささいなことの中にも、私たちがかわる人々との間にもそのみこころをお示しになります。つまり、御子イエシュアが、毎日、ご自身とかわる人々に対してどのように接されたのかを見ればよいのです。それに倣うことです。

●イエシュアが公に働きを開始されたとき、「わたしの上に主の御霊がおられる。主(神)が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれた」と宣言し(これはイザヤ書の引用ですが、自分に当てはめられて語られたのです)、「わたしが父におり、父がわたしのうちにおられる」と言って働きをなされました。イエシュアは人々に御父の教えを語っただけでなく、御父の心をもって人々とかわられました。さまざまな病気で苦しむ者たち、社会から疎外されていた人々、傷ついた者たちをあわれみ、病をいやし、疎外された者たちを回復させました。ツアラートという皮膚病にかかった者にだれも触れようとしなかった当時、イエシュアは自らの手を触れていやされました。イエシュアはどんな人をも受け入れ、心優しく接せられました。疎外された者に対してはあわれみ、またご自分を冒瀆する者を赦されました。またなかなか真理を悟ることのできない弟子たちに対しても、忍耐深くあらわれました。その主がこう言われます。

「わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ 13:34)

「わたしがあなたがたを愛したように」－このことばは、私たちが愛し合う愛がどのような質のものであるべきか

## אגרת שאול אל האפסים

を教えてください。「キリストのように生きる」とは、イエシュアがあなたがたを愛したような愛を知ることです。そのためには、私たちは十字架のもとに行かなければなりません。それは御子イエシュアが、いや御父がこの私を愛された愛の深さを知るためです。

● 私たち人間の愛は、すばらしい成果を上げると強まり、失敗とともに衰えることがあります。しかし神の愛はそうではありません。神が愛しておられるのは欠けだらけのままの私たちです。たとえ私たちが、神をはねつけても、無視しても、拒絶しても、馬鹿にしても、従わなくても、私たちに對する神の愛は変わりません。私たちの行いの善し悪しで神の愛を強めたり、弱めたりすることはできないのです。私たちが失敗したからといって、神の愛が閉ざされることもないし、逆に成功したからといって神の愛が増し加わるわけでもないのです。神はありのままの私やあなたを愛しておられるのです。と同時に大切なことは、神はあなたをそのままにしてはおかれないということです。私たちがイエシュアのように、キリストのようになることを神は望んでおられます。神はご自身のご計画に従って召された者たちを、「御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定めたからです」(新共同訳—「御子の姿に似た者にしようとあらかじめ定められました」)。|(ローマ 8:29)。それは、「御子が多くの子弟たちの中で長子となられるためです」。ここでの「長子」とは、神の家族における代表的存在、模範的存在だという意味で使われています。

◆ 私たちが「キリストのように」生きることを神は願っておられます。そのことができるように、イエシュアに与えられた同じ御霊が私たちにも与えられています。ですから、自分にかかわる人々、自分を取り囲む人々の中にあつて、神の愛の泉をもった存在となれるように祈りましょう。ただ、その愛に到達できない自分の姿を見て、氣落ちしてはなりません。この世においては、愛において成長するには時間がかかります。しかしやがて御国が完成されるときには、完全に、第二のアダムである「新しい人を身に着」た者と変えられる希望があるのです。その希望を持ちつつ、この世において、キリストのような愛をもって歩むことを目指したいと思います。